



TITLE:

太平洋を越えてーアメリカ華僑と  
中国政治（1900年-1949年）ー(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

宋, 玉梅

---

CITATION:

宋, 玉梅. 太平洋を越えてーアメリカ華僑と中国政治（1900年-1949年）ー. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20467>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-07-01に公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	宋 玉梅
論文題目	太平洋を越えて—アメリカ華僑と中国政治（1900年 - 1949年）—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位申請論文は、アメリカ合衆国に在住する華僑が、孫文らの革命運動（1905-1911年）、日中戦争（1937-1945年）と第二次国共内戦（1946-49年）などの革命と戦争の時代であった20世紀前半にあって、本国に対する政治意識をどのように形成したのかについて、明らかにすることを目的としている。</p> <p>従来の先行研究では、アメリカ華僑の合衆国に対する「忠誠心」、あるいは逆に彼らの本国への「愛国心」が研究者の関心を引き付けてきた。アメリカ人研究者が在米華僑の合衆国への「忠誠心」の存在を主張するのに対し、中国人研究者は、華僑の中国への「愛国心」を前提に研究を進めてきたのである。一方で、孫文ら国民党系の要人の活動を中心に、華僑がどのように中国の政治から影響を受け、また中国の政治に関わってきたかの問題も、多くの研究者の課題とされてきた。</p> <p>こうした動向を踏まえ、学位申請者は、20世紀におけるアメリカ華僑と中国政治との関係をトランスナショナルなものであるとの視座を確保した上で、20世紀前半における反満革命・抗日運動・内戦、米中・日中関係や国共関係の影響を考慮しながら、華僑の越境行動を考察し、彼らの政治意識の形成過程を明らかにすることを目指した。具体的には、①孫文から革命支援の働きかけを受けた在米華僑団体の致公堂、②アメリカ華僑三世として抗日戦争に参加した楊帝沢、③国共両党の政治に参加した華僑団体の指導者司徒美堂についての事例研究がなされている。</p> <p>本論文は、序章、第1章、第2章、第3章、結語から構成されている。</p> <p>まず序章では、「華僑」「華人」「Overseas Chinese」「Chinese American」などの用語を歴史的に整理し、従来有力であった国籍による「華僑」と「華人」の区別は国際法的には根拠薄弱となっていること、日本における中国系アメリカ人研究では、トランスナショナル概念が移民と国民国家の関係に限定されて用いられていることが指摘される。その上で、序章は、トランスナショナルの視座からする20世紀前半のアメリカ「華僑」の政治意識・政治参与に関する研究は事実上空白状況にあることを指摘し、事例研究の必要性を説いている。</p> <p>第1章では、中華民国で「国父」と呼ばれることになった孫文と、彼の革命宣伝・資金調達の対象であったアメリカ華僑団体「致公堂」との関係について述べる。従来の「愛国華僑」の華僑像や「華僑は革命の母」といった国民党側の宣伝とは異なり、致公堂は必ずしも全面的に孫文の運動を支援した訳ではなかったことが指摘され、さらに華僑たちは孫文を通して中国の政治に参加しようとしたが、孫文の側この要求に応えなかったため、両者の関係が悪化していったとする。</p> <p>第2章では、ハワイ生まれのアメリカ華僑三世であり、アメリカと中国の二重国籍者であった楊帝沢の事例が取り上げられる。本章は、上海事変では合衆国海軍陸戦隊に参加し、抗日戦争に際しては、当初中国陸軍の、のちに合衆国陸軍の軍人となった彼の歩みを辿り、従来の研究が一面的に考えてきた「忠誠心」が彼の場合、米中二つの国家にともに向けられ、その政治意識はトランスナショナルなものであったことを明らかにした。</p>			

第3章では、アメリカ華僑の中国政治への直接参与の事例として、国民党政権の国政諮問機関である参政会の参政員となったニューヨーク致公堂の指導者司徒美堂の行動に注目する。本章は、中国大陆における国共内戦は、アメリカ華僑のコミュニティにまで及んでいたこと、共産党の働きかけの結果、華僑の支持は1945年以降、共産党の側に向けられることになったことを指摘している。

結語が、それまでの行論をまとめ、今後の研究の展望を述べている。楊帝沢は中国への帰国をへて最終的にアメリカを定住先を選び、共産党支持へと転じた司徒美堂は中国大陆に定住したが、彼ら華僑の行動様式のすべてがいわゆる「愛国華僑」にあてはまる訳ではなく、孫文との対立（致公堂）や中国と合衆国への二重の忠誠心（楊帝沢）、国民党から共産党へと政治参加の立場変更（司徒美堂）のように多様性が認められるとし、最後に太平洋史から見るアメリカ華僑研究の必要性を説いている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文を従来のアメリカ華僑研究と比較して見た場合、第一の特徴あるいは学問的成果として指摘できるのが、「国民国家」の概念では解釈し切れないアメリカ華僑と中国政治との関係を、「トランスナショナル」の概念を用いて検証したことである。換言すれば、従来の研究と異なり、華僑の視点から中国と華僑との政治関係のプロセスを解明することによって、華僑の政治意識研究の空白を埋めたことである。トランスナショナル概念は、人類学者ニーナ・シラー(Nina Schiller)が、1990年の共著論文で明確に定義し、移民研究に導入したものであり、移民のアイデンティティは出身地(native land)とホスト社会(host society)のどちらかに属するものではなく、両方からの影響をうけ形成されるものであるとされる。日本のアメリカ華僑研究では、トランスナショナルは国家間の人の移動としてのみ捉えられ、「国民国家」と結び付けられた研究がなされてきたが、本論文はこうした研究史上の問題点を指摘し、これを克服したものとなっている。

また第二の特徴あるいは学問的成果として、本論文が、過去に中国国民党が宣伝し、中国大陸の研究者も追隨して華僑研究の前提のように考えてきた「愛国華僑」論に対し、大幅な見直しを求めていることが指摘できる。たとえば、1910年代から20年代にかけてのアメリカ華僑団体は、辛亥革命に向けての資金調達という貢献に対する返済、また政治的報酬(政権からの表彰)を得られなかったため、反孫文派の政治行動をとることになったし(第1章)、抗日戦争期、アメリカ合衆国に対する忠誠心と中国への忠誠心をもとに有した楊帝沢のような事例も存在する(第2章)。さらに、単に「国を愛する」といっても、政権への支持とはイコールではないことも、1930年代から40年代にかけての、アメリカ華僑を代表する人物と言ってよい司徒美堂の行動・言説から明らかにされた(第3章)。

その上で、第三に、本論文の成果として、20世紀前半におけるアメリカ華僑の歴史の中で、従来の研究の中で見過ごされてきた、あるいは軽視されてきた諸事実を発掘し、実証研究の対象として取り上げたことが指摘できる。例えば、孫文に対するアメリカ華僑社会の対応の実態と彼らの率直な孫文観(第1章)、サンフランシスコ華僑コミュニティとニューヨーク華僑コミュニティの「祖国」に対する政治行動の相違(第1・3章)、日中戦争期におけるアメリカ華僑の中米間のネットワーク形成や情報提供などの分野での役割発揮(第2章)、国共両党の抗争の華僑への波及(第3章)、などである。

このほか、本論文がアメリカ、中国大陸、台湾に分散・保管されている孫文、楊帝沢及び司徒美堂をはじめとする華僑華人の資料に関連する公文書や個人文書など一次史料を幅広く収集し、解読・分析を行ったことも評価できる。アメリカ華僑社会を代表する新聞『中西日報』の利用が本格的になされたのも、史料言語として中国語、日本語、英語史料が用いられていることも、同様である。「トランスナショナル」が語られながら、従来の研究は、史料の言語的壁を必ずしも乗り越えてこなかったからである。

しかしながら、本論文に、なお解決を要する諸課題が残されていることも確かである。たとえば、本論文の序章が、「華僑」「華人」などをめぐる概念整理から論を起していることは方法論として支持できるが、この概念整理と先行研究批判とのリンクが弱いことは、指摘されねばならない。また、アメリカ華僑全体の政治意識の形成・変貌を論じるのであれば、事例はより多く検討され、より多くの個人ないしは組織の

動向が研究対象とされるべきであろう。また、申請者は本論文の結語の最後で、「太平洋史から見たアメリカ華僑」なる視座を提起しているが、新たな視座がもたらす新たな研究領域がどのような内容を持つものなのか、必ずしも明確に述べてはいない。ただし、これらの問題点乃至課題は、今後の申請者の研究活動によって、解決が見込めるものではある。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第22項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降